

ASnet(セカンドアクション・ネットワーク)第5回活動交流会 開催報告

あらたな協同・連携の可能性を考えよう！

- ◆日時：2019年7月6日(土) 13:30~17:00 会場：東京都生協連会館 会議室
- ◆参加者：阿南、池田ち、池田智、井上、上田、河野、小浦、下野、島田、中村、花本、深井、田川 / (欠席：、長島、宮本) / オブザーバー：炭谷(日本生協連)、末益(東京都生協連)
- ◆講師：パルシステム連合会 常勤監事 松本典丈さん、(一財)地域生活研究所 研究員 三浦一浩さん

【開催概要】

「あらたな協同・連携の可能性を考えよう！」をテーマに、パルシステム連合会の松本典丈さんと、地域生活研究所の三浦一浩さんを講師にお招きし、学習、交流を深めました。

これに先立ってアスコン理事長の阿南さんから挨拶を頂きました。

また、今回のテーマの発端となった、第4回交流会の内容を説明報告し、欠席だったメンバーやあらたにご参加いただいた方々との共有をはかりました。

松本さんからはご自身の歩みを数字で、多様性については視覚的に表現した資料等でわかりやすくお話いただきました。三浦さんからは「共同購入分け合い班」の写真を導入に、貴重な写真や資料から、「生活の協同の意味」について詳しくお話しいただきました。

お話ののち、フリップ(A4紙)を使用して、お二方への感想や質問等のキーワードを書いて発表し、それを受けて、お二方からお応えや考え方をお話しいただき、内容を深めることができました。

何もないところから、生活を協同する必要に迫られた、意思のある人々により作られた協同の組織が、多様性を認め合いながら発展してきた歴史を踏まえて、市民が主体となる、これからの生活の協同の形を、参加した各々が臆げにでも描くことができた交流会となりました。ASnetの次回以降の活動で深められるよう進めます。

時間はタイトになりましたが、交流の中に各自の取り組みの報告も垣間見えて、現在、メンバーのフィールドは違っても、そこに活かせるヒントを得て、次のアクションに各自が繋げていくことも必要です。今回は地域生活研究所、日本生協連からの参加もあり視点を広げること意見もいただきました。

開催にあたり、会場費、資料代等はアスコンからの支援をいただきました。準備等については都連在勤メンバーの協力があり、有志からのお菓子の差し入れもいただきました。(詳細は開催報告にまとめ)

1. 進め方 (進行は河野さん)



河野：前回（第4回）交流会で持ち寄った「気になる数字」から発展した論議では、人口構成、社会的課題、人々の暮らし方や感じ方などの大きな変化の波にあって、消費者・市民が主体となる社会とはどういうものか、またその中であらためて生協や協同組合の役割はあるのか、というテーマが浮かび上がってきた。今日は講師お二人の話をまずお聞きした後、論議を掘り下げていきたい。

阿南（あいさつ）：ASCONE「消費者市民社会をつくる会」の目指すことは、協同組合の考え方と共通する。新たな協同と連携の可能性を探ることは、消費の場面に限らず地域社会をより良くする道筋だ。今日は講師の方々や新しい参加者とともに学びたい。

2. お話

【パルシステム連合会 常勤監事 松本典丈さん】

- 前回の論議は数字で始まったと聞く。数字には魔力もある。数字やグラフを見極める力も必要だ。
- 人生100年時代と言われる中、自分の個人史を振り返ってみれば、これまでと比べてもまだ相当に長い期間を今後生きるだろうことも見えてくる。貯蓄2000万円問題はすぐ政争の具になり、徹底的な論議や報道ふくめた掘り下げが不足したのは残念。年金問題は一人一人の働いた歴史、資産、健康状態や寿命など、みな前提が違うが、それらにきちんと向き合って考えている人が少ないのも事実。
- 生協組合員の年齢構成動向を見れば、ボリューム層がそのまま高齢へ移行しつつある。これは悲観的に見るのではなく、長く生協を利用し続けてくださる組合員の存在を「組織的・社会的資産」と捉えておくことが大切だ。しかし次世代に向けてはアプローチが不足していることも認めなければならないし、現在・未来の潜在的かつ多様化したニーズに合致しているのかも見極めなければならない。
- 「多様性の共存」が長らく我々の組織におけるキーワードだ。多様な個々人の存在はもちろん、一人の中にも性格や秘密など多面性がある。人は変わるし組織も変わる。内外の要因構成やつながり方も常に変動している。簡単に「色分け」すべきではないし、その色分けを固定すると現実と乖離する。
- 三角形～ピラミッド～組織の階層構造と連想しがちだが、管理や上位下達しか重ねられないなら道を誤る。実際の組織は実はもっとフラットだしボトムアップも活かさなければ組織や社会は機能しない。
- 今、日本は「自立型市民社会」を志向している。良い社会を芝居になぞらえれば、暮らしの場（劇場）において自らが希む芝居づくりのために、台本や構成や役者に良い影響を与える多様な関係をつくり出すことができる「良い観客（よい消費者・市民）」であらねばならないということでもある。
- 「世の中の規則は消費者・市民が決める」「生協の規則は組合員が決める」という意思や原則について、あらためて想いを致したい。

【（一財）地域生活研究所 研究員 三浦一浩さん】

- 大学で学生に協同組合について講義することがある。今の学生は西暦2000年頃の生まれだから、トラックの後ろで商品を分けている協同の具体的な姿は知らない。したがって、話し合い協力して暮らしの問題を解決していく協同の機能と、今の「生協」とが結びつかないのは当然だ。
- 昭和初期、賀川豊彦が関東大震災支援の一つとして江東区本所に消費組合を設立した。購買店舗も複数あるが、栄養食配給事業や、信用組合や質屋まで併設した。この信用組合は90年後の今も健在だ。
- 「生活協同組合」は英語で「Consumers' co-operative」と訳されるが、「消費（者）組合」の直訳だ。で

は「生活・協同組合」の語はどこからきたのか？ 戦前に中野・杉並に存在した消費組合の関係者の「この戦争が終わったら、単なる消費組合ではなく理髪や風呂屋といったものも含め、生活全体を協同組合化しなければだめだと考え、生活協同組合を作ろうと考えた」との証言が残っている。「生活協同組合」の言葉は東京で生まれたと考えられる。

- 実際に昭和 20 年代に設立された生協は、購買の他さまざまな利用事業を併設していた。医療・歯科、浴場、保育園、幼稚園、理美容院、クリーニング、洋服加工、靴修理、印刷、補習教室（塾）、集会場、葬祭、文化活動、娯楽、健康相談、簡易宿泊、図書館、育児相談、授産所…。もちろん消長はある。
- 合併や分割や、法人形態の変更ありなどで組織の形は変えつつも今に残る施設・事業も多い。保育生協、美容生協もまだ存在する。変わり種として、ガス、水道、電気の供給事業（発電含む）、地域のケーブルテレビ生協も。まとまった資本がないから株式会社ではなく「生活協同組合」の形を採った歴史もあった。
- 生活全般の協同課題が先に在り、その解決のためのツールとして「生協」の形が構想されてきた歴史からしても、現今の社会情勢の中であらためて人々が手を携えて作る手段や場として「生活の協同組合」を捉えなおすことができるのではないか。



松本さん



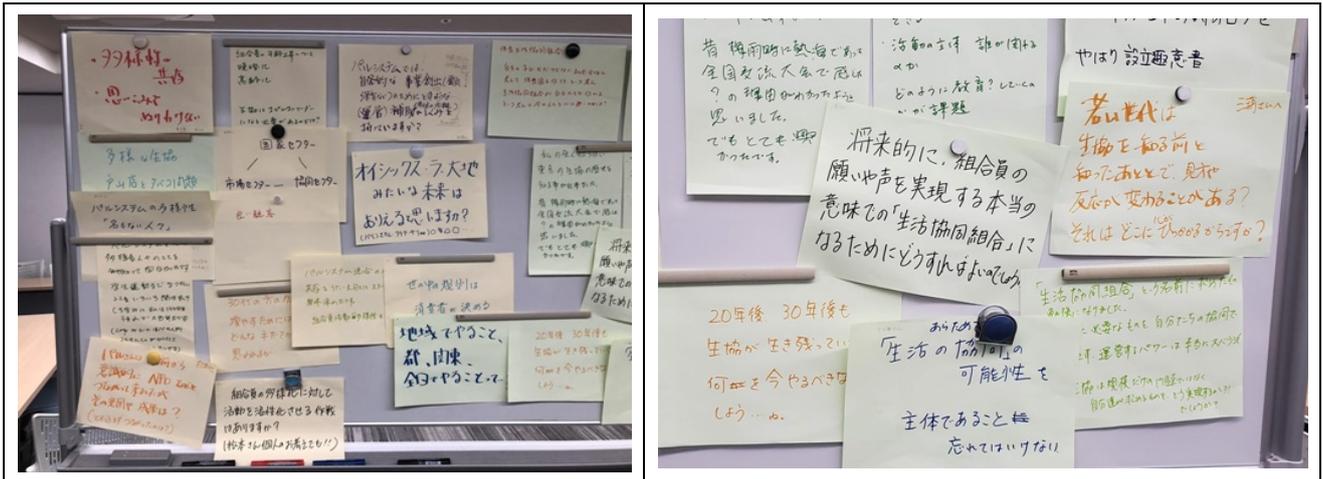
三浦さん

3. お話を聞いて ～フリップボードから～

【松本さんのお話の中で印象に残ったこと・質問】

- オイシックス・ラ・大地みたいな未来はありえると思いますか？ パルシステム+デリ+クラブ etc)
- パルシステムさんの組合員さんの平均年齢の若いワケ？（具体的な施策・アプローチなどありますか？） 個人的には広報・メディア・イメージなどが他に比べ Young Mind な感じ。
- 30代の方の加入を増やすためにはどんな手立てが必要と思われるか
- 組合員の年齢上昇 晩婚化 高齢化。生協はオピニオンリーダーになる必要があるのでは？
- 組合員の多様化に対して、活動を活性化させる作戦はありますか？（松本さん個人のお考えでも!!)
- パルシステムでは自発的な事業創出（電気・保育など）のためにどのような考え方を広報し、運営補助などのしくみを持っていますか？
- 「世の中の規則は消費者が決める」
- 「良い観客」

- 「国家セクター 市場セクター 協同セクター」
- パルさんは以前から意識的にNPOなどつながって来ましたが、その意図や成果は？（取り込まずつながったのはなぜ？）
- パルシステムの多様性 「名もない人々」
- パルシステムをつくる多様な人々のことを知って面白かったです。学生運動などなつかしいことをいろいろ聞きました。（コープみらいのほぺたんよりこんせんくんがカワイイと思ってしまう私です）
- パルシステム連合が「多様性の共存」をうたい文句としてスタートした話は興味深かったです。組合員活動の多様性を求めているのか？認めているのか？
- 「多様性の共存 思い込みで塗り分けない」
- パルシステムや生協の固有の課題ではなく、協同ということまた生きる中での意識や人との付き合いかたなど広い観点からのお話が糧になりました。



【三浦さんのお話の中で印象に残ったこと・質問】

- 生協は、いまより自由だったんだ！と実感。以前に会議で「保育園を作ろう！」と言ったとき、スルーされたのを思い出し、硬直化された組織が問題だと痛感します。
- 私の全く知らない東京の生協の歴史を知る事が出来ました。昔、梅雨時に熱海であった全国交流大会で感じた「？」の理由がわかったと思いました。でもとても興味深かったです。
- 「多様な生協」 戸山店とタバコ問題（の関連が理解できた）
- 地域でやること、都、関東、全国でやることって？
- 保育生活協同組合。自分の子どもだけではなく社会全体を考えて、保育園を作ろうという考え。生活協同組合が自分たちで作れるという考えは今の人たちには無いのでは？
- 「生活を協同する」は、専務理事の時のクチぐせ やはり設立趣意書（が基本なので立ち返る）
- 生活の協同を考え直す。 これからはNPOだ!!
- 若い世代を“生協”に取り込むのに何が必要？
- 若い世代は生協を知る前と知った後とで、見方や反応が変わることがある？ それはどこに心がひっかかるからですか？
- 生協の存在の重要性は高齢化社会にこそ発揮できる。 活動の主体 誰が関わるのか。 どのように教育していくのが課題

- 20年後、30年後も生協が生き残っていくには何を今やるべきなのでしょう・・・ね。
- 将来的に、組合員の願いや声を実現する本当の意味での「生活協同組合」になるためにはどうすればよいのでしょうか。
- 生協の協同を創出するためには、市民のエンパワメントが必要と思われます。生協として何をすべきでしょうか。
- あらためて「生活の協同」の可能性を。 主体であること忘れてはいけない。
- 「生活協同組合」という名前に求めたもの。勉強になりました。生活に必要なものを自分たちの協同で創り出す。運営するパワーは本当にスバラシイ。生協は規模だけの問題ではなく、自分たちが求めるものをどう実現するか!? でしょうか？
- カンタンなコープのつくり方は？ NPOとは別に法的・条件的な障壁を考えてみる。
- 生協の原理原則と歴史からお話を伺い、頭が整理されました。この辺りを念頭に置きながら地域活動を含めた生活を送っていきたいと思います。

【参加者からの感想・質問を受けて:松本さんより】

- ・ 生協は「オピニオンリーダー」とは違うポジションなのではないか。組織の厚みで基盤を耕すことが生協の強みではないか。
- ・ 生協における事業と組織の「両輪」というのは、実は専従者側が編み出した言葉だと思われる。専従者からすれば、さまざまな活動は組合員がやってほしいということだ。
- ・ パルシステムはその内部に（活動の）資源が無かったから外部（の団体）とつながっていく以外に無かった。課題のすべてを抱え込むほど経営も組織も強くなかった。
- ・ 市民活動助成金対象に、組合員要件を撤廃するに大分時間がかかった。
- ・ 「生活協同組合」は若い人向けに翻訳したほうがよいのかもしれない。インターンシップは生協に直接触れてもらういい機会。
- ・ オイシックスなどの統合はトレンドと合致したから。「パル」と「デリ」の事業統合はありうる。仕入れや物流機能は一緒にできるが、ブランドは別でもよい。人手不足解消になるし、自動車の数を減らす効果も大きい。
- ・ 神戸や兵庫県では、コープは生協や地域の枠組みを超えた「ステイタス」だ。
- ・ 全体では生協（コープ）ブランドは、イメージが浸透していない。大学で初めてコープを知る。うまく地域につなげていかないといけない。
- ・ 生協の規則は（専従者ではなく）組合員が作る。
- ・ 均質化とは正反対の位置にある「多様性」は、市民活動を通じて学ぶことができる。
- ・ 社会的信頼を裏切らない、ということが重要。
- ・ 女性の方が正しいことに感動する力は強い。
- ・ 若い人が意見を出せ自由にできる雰囲気を作るには、官僚的であってはダメ。
- ・ 生協は「いろいろあっても、けなげに生きる」のが基本スタンス。

【参加者からの感想・質問を受けて:三浦さんより】

- ・ 生協はめんどくさそうというイメージはある。
- ・ 生協そのものが生き残るには「パル」や「デリ」は無くなってもいい。姿を変えればいい。
- ・ 事業と活動の「両輪」という二元的な捉え方ではなく、「事業も活動」と認識すべき。

- ・何かやりたい場合の選択肢として生協という組織の形があってよい。
- ・今の生協が高齢化をしているのは、(当時、それが必要だから) 生協を作った人たちがそのまま高齢になっているだけ。
- ・生協のための協同組合という仕組みを、(新しい暮らしの課題への対処に必要なから) 新しい人たちが使い、立ち上げればいいだけのこと。
- ・ただ、新しい試みをする人たちをどう助けられるかが課題。スタートアップの資金、ちょっとした支援ならできるのではないか。既存生協に新しい取り組みをする余力はなくても、一定の規模の大きさがあれば、側面や後ろで助けることはできる。
- ・組織内でも外との関係でも、「助け合う」空気、「認め合う」空気の醸成が大事だ。
- ・生協の発展とネットワークのために、都連の役割、日生協の役割、それぞれ違っていい。
- ・協同組合と生協とNPOとをつなぐ動きがこれからの社会を作る基盤になる。

4. 今後に向けて

三浦さんのお話から本来の「生活協同組合」が生まれた歴史を知り、既存の生協や協同組合の枠組みとは別に、生協(あるいは形はNPOでも企業であっても、生協的な助け合いを基本理念とする組織)そのものを自ら立ち上げる、というアプローチがあるということを改めて認識できたのは大きな収穫でした。

また、松本さんのお話からは、自らの組織内部の「多様性」を認めることが組織の力を発揮する源泉であり、フラットな組織や、内部資源だけに頼らず「外部と自在につながる」ことが取り組みのパフォーマンスを引き出すことを学びました。

既存の生協や協同組合は現行の事業活動を大切に営み、若い世代への働きかけを強める一方、地域で県域で全国で、生協・協同組合間やNPO・諸団体・企業体・行政などと「つなぐ」「つながる」ことを通じて、助け合いを具体化し可視化しながら、社会基盤としての「自立型市民社会」の志向を後押ししていくという役割があるらしいことも見えてきました。

次回以降に向けては、どのような「組織の作り方」「つながり方」があるのか、などの切り口も含めたテーマを設け論議をつなげていくこととしました。

以上

購買以外の事業を行っていた地域生協(1956年8月)

岡山マイフ	新潟区	美容、理髪、診療
徳島	墨田区	理髪、洋服
徳島	江東区	美容
徳島	江東区	浴槽
東部職域	品川区	洋装加工
徳島	大田区	理髪、パーマ、歯科
徳島	大田区	洋服
大崎	世田谷区	パーマ、理髪、クリーニング、洋服
徳島	渋谷区	クリーニング・傘の折り
徳島	中野区	パーマ
大崎町	中野区	印刷
杉並西部	杉並区	洋裁
杉並東部	杉並区	理髪、靴修理
池袋南町丁目	杉並区	クリーニング
豊島中央	豊島区	補綴装置、義歯修理
両国第一	豊島区	縫打直し、時計修理
両国第二	豊島区	美容
北区労働者クラブ	北区	クリーニング
津田	北区	診療所、保育園
小暮町	板橋区	洋加工、保育園
ムサシノ	板橋区	パーマ、理髪
東京競馬場	府中市	理髪
	府中市	理髪、クリーニング

出所:『東京の生協運動史』123頁(資料30)

講師の投影資料より



初期の生協設立者による作品
(色紙) から一部を拡大